

韃靼館雑字の h-について

吉池孝一

—

モンゴル語の母音始まりの音や軟口蓋子音・口蓋垂子音は、語頭の位置において、歴史資料や現代方言でどのような現れ方をするのであろうか。

	第1	第2	第3	第4	第5	第6
パスパ字モンゴル語	ꞑ-	h-	q-	q-	g-	k-
ウイグル字モンゴル語(元代)	'(ꞑ-)	'(ꞑ-)	X-	X-	K-	K-
華夷訳語甲種本	ꞑ-	h-	q-	q-	g-	k-
元朝秘史	ꞑ-	h-	q-	q-	g-	k-
-----						
モンゴル文語	'(ꞑ-)	'(ꞑ-)	X-	X-	K-	K-
ハルハ方言	ꞑ-	ꞑ-	G-	x-	g-	x-

※ハルハ方言は音声表記、モンゴル文語及びウイグル字モンゴル語は翻字(注4参照)、その他は音特徴を簡略に記したローマ字。

表1

ハルハ方言や内蒙古の主要方言であるチャハル方言において母音で始まる語は、パスパ字モンゴル語や華夷訳語甲種本や元朝秘史で、上表第1のようにꞑ-(母音)で対応するものと、第2のように h-(摩擦音)で対応するものがある。なお、元代のウイグル字モンゴル語<sup>1)</sup>では表記上、第1、第2ともにꞑ-となる。これは後代のモンゴル文語のウイグル文字によっても同様である(初期のいわゆる「ウイグル式モンゴル文字」および後代の「モンゴル文字」を共にウイグル文字と呼ぶことにする)。

本稿では、現代のハルハ方言のように語頭の h-に対応するものがゼロであり(上表第2)q-に対応するものが摩擦音であった(上表第4)、と推定し得る資料として韃靼館雑字を紹介する<sup>2)</sup>。韃靼館雑字(15世紀後半か)と華夷訳語甲種本(1389年)とは、内容および漢字の用法がほぼ一致しており、前者は後者を引き写したものと考えられる。もっとも少数ながら異なる漢字を使用した部分もある。また韃靼館雑字にはウイグル字モンゴル語が付されている。このウイグル文字の用法には元代のウイグル字モンゴル語および伝統的なモンゴル文語のそれと異なる部分があり興味深い<sup>3)</sup>。

以下、華夷訳語甲種本で語頭の h-を想定することのできる語彙を Mostaert(1977)<sup>3)</sup>を参照して選びだし、対応する韃靼館雑字を付し両者の相違点を確認した。なお、近世北方漢語の軟口蓋の摩擦音を持つ漢字音でモンゴル語の語頭の h-を、母音始まりの漢字音でモンゴル語のꞑ-を表わしたものとす。ウイグル文字のローマ字への翻字法は中村/松川(1993:p.23)掲出の方法によった<sup>4)</sup>。

華夷訳語甲種本<sup>5)</sup>

韃靼館雑字<sup>6)</sup>

	漢字表記	漢字表記	ウイグル文字表記
4. 星	火(h-)敦	火(h-)敦	'WDWN
7. 烟	忽(h-)紉	忽(h-)紉	'WYNYN

23. 林	槐 (h-)	槐 (h-)	'WYY
63. 年	桓 (h-)	桓 (h-)	'W N
87. 柳	希 (h-) 扯孫	希 (h-) 扯孫	'YC'SWN
98. 根	忽 (h-) 札兀兒	忽 (h-) 扎兀兒	'WC'XWR
101. 種子	許 (h-) <sup>舌</sup> 列	許 (h-) 列	'WYR-'
132. 牛	忽 (h-) 格兒	兀 (ㄉㄞ <sup>ㄨ</sup> -) 格兒	'WK'R
141. 狐	忽 (h-) 捏干	忽 (h-) 捏干	'WYN'K'N
169. 蜘蛛	哈 (h-) 阿里真	哈 (h-) 阿里真	'X'LCYN
170. 蛾	赫 (h-) 兒別該	赫 (h-) 兒別該	'RP'K'Y
192. 鳶	赫 (h-) 列額	赫 (h-) 列額	'L'K'
291. 囊	呼 (h-) 呼塔	呼 (h-) 呼塔	'WXWD'
341. 氍毹	闊 (q-) 亦抹孫	潤 (q-) 亦抹孫	XWYYMWSWN
347. 線	忽 (h-) 答孫	忽 (h-) 答孫	XWD'SWN
448. 牧牛人	忽 (h-) 格赤	兀 (ㄉㄞ <sup>ㄨ</sup> -) 格兒赤	'WYK'RCY
539. 送	許 (h-) 迭	許 (h-) 迭	'WYD'
540. 愁	赫 (h-) 魯模	赫 (h-) 魯木	X'YYLWMW
542. 羞	喜 (h-) 扯	喜 (h-) 扯	'YC'
544. 嗔	孩 (h-) 抹思八	孩 (h-) 思抹八	''YYMWSP'
578. 翻	忽 (h-) 兒八	忽 (h-) 兒八	XWRP'
590. 拴	忽 (h-) 牙	忽 (h-) 余	XWY- '
604. 報恩	哈 (h-) 赤 <sup>中合</sup> 里溫	阿 (ㄉㄞ <sup>ㄨ</sup> -) 赤 哈里溫	''CY X'RYXWL
616. 恐嚇	哈 (h-) 阿黑藍	哈 (h-) 阿黑藍	''X'XL'N
617. 紅	忽 (h-) 刺安	忽 (h-) 刺安	'WL'X'N
643. 十	哈 (h-) 兒班	哈 (h-) 兒班	''RP'N
680. 眉	哈 (h-) 泥思 <sup>中合</sup>	哈 (h-) 泥思哈	X'NYSX-'
682. 髮(髮)	許 (h-) 孫	許 (h-) 孫	'WYSWN
684. 唇	忽 (h-) <sup>舌</sup> 侖勒	忽 (h-) 羅勒	XWRWL
695. 掌	哈 (h-) 刺 <sup>中罕</sup>	哈 (h-) 刺罕	''L'X''N
701. 肝	黑 (h-) 里干	黑 (h-) 里干	'LYK'N
747. 西	呵 (h-) 羅捏	阿 (ㄉㄞ <sup>ㄨ</sup> -) 羅捏	'WYRWN-'
761. 底	喜 (h-) <sup>舌</sup> 魯阿兒	喜 (h-) 魯阿兒	'YRWX'R
773. 虛	豁 (h-) <sup>黑</sup> 脫兒忽	斡 (ㄉㄞ <sup>ㄨ</sup> -) 黑脫兒忽	'WXDWRXW
791. 狹	希 (h-) 兀壇	希 (h-) 兀壇	'YKWD'N
837. 無妨	兀祿 哈 (h-) 里札忽	兀祿 哈 (h-) 里扎忽	'WYLW ''LC'XW

表 2

華夷訳語甲種本と韃靼館雜字とで漢字表記が異なる部分がある。また、韃靼館雜字のウイグル文字表記と伝統的なウイグル字モンゴル語の表記とが異なる部分がある。その意味するところを以下に述べる。

韃靼館雑字は華夷訳語甲種本の表記法をそのまま引き継いでいるようであるが、異なる漢字を用いたものが5例ある。以下、問題となる部分の特徴のみ記す。モンゴル文語は Mostaert(1977)により、やはり特徴のみを記す。

	華夷訳語甲種本		韃靼館雑字		文語
	漢字表記	漢字表記	ウイグル文字表記	ウイグル文字表記	
132. 牛	忽 (h-)	兀 (ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	ㄉㄛ-
448. 牧牛人	忽 (h-)	兀 (ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	ㄉㄛ-
604. 報恩	哈 (h-)	阿 (ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	ㄉㄛ-
747. 西	呵 (h-)	阿 (ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	ㄉㄛ-
773. 虚	豁 (h-)	幹 (ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	'(ㄉㄛ-)	ㄉㄛ-

華夷訳語甲種本で h-であったものが上記5例の韃靼館雑字の漢字表記ではㄉㄛ-となつてあらわれる。このㄉㄛ-表記が何を意味するか。語頭の h-を留める擬古的な表記のなかに実際の音であるㄉㄛ-が顔を出したものか、それとも文字通り h-を有し、一部の音のみがㄉㄛ-であったのか、これだけでは確かなことは分からない。なお、韃靼館雑字のウイグル文字表記がㄉㄛ-であるのは、元代のウイグル字モンゴル語や後代のモンゴル文語など伝統的な表記と一致する。

### 三

以下、韃靼館雑字のウイグル文字表記とモンゴル文語のウイグル文字表記とが異なるものを挙げる。

	華夷訳語甲種本		韃靼館雑字		文語
	漢字表記	漢字表記	ウイグル文字表記	ウイグル文字表記	
*341. 氍毹	闊 (q-)	澗 (q-)	X-	X-	ㄉㄛ-
347. 線	忽 (h-)	忽 (h-)	X-	X-	ㄉㄛ-
540. 愁	赫 (h-)	赫 (h-)	X-	X-	?
578. 翻	忽 (h-)	忽 (h-)	X-	X-	ㄉㄛ-
590. 拴	忽 (h-)	忽 (h-)	X-	X-	ㄉㄛ-
680. 眉	哈 (h-)	哈 (h-)	X-	X-	ㄉㄛ-
684. 唇	忽 (h-)	忽 (h-)	X-	X-	ㄉㄛ-

\*341は文語およびモンゴル語諸方言からみて語頭の h-を想定することができるけれども漢字表記では破裂音を用いている。

先に挙げた表1の第4にあるように、元代のウイグル字モンゴル語や後代のモンゴル文語において、ウイグル文字 X-は q-が想定される音節の表記に使用される。この点は、ここでは実例を挙げなかったけれども、韃靼館雑字でも同様である。ところが、上記7例については、X-を語頭の h-の表記にも使用している。これは元代以降の伝統的なウイグル字モンゴル語の表記には無い用法であり誤用ともいえる。ペリオやモスタートが疎漏の多い表記と批判したこともうなずける(注3参照)。それでは、なぜこのような特異な用法が生まれたのか。恐らく、韃靼館雑字の著者の言語では、ウイグル文字 X-で表記されるモンゴル語音 q-は、現在のハルハ方言のように、すでに摩擦音となっていた。そのため、文字 X-は摩擦音に対応するとの意識が生じていた。そこで、語頭の h-に相当する漢字音(軟口蓋の摩擦音)の表記にあたって、伝統的な

表記によればゼロでなければならぬところ、一部につき伝統的な表記からはずれ文字 X-を用いてしまった、ということであろう。なお、\*341. 毳襪では破裂音声母の漢字「闊」「濶」が使用されている。これは q-が想定される音節と同じ表記であるため、直接この漢字音により X-で表記したとも考えられる。

#### 四

黄宗鑑(1993)<sup>7)</sup>によると、華夷訳語甲種本(1389年)から登壇必究(1598年)や盧龍塞略(1610年)に至る二百余年のあいだ総じて語頭の h-の脱落はなく、その後更に二百数十年を経て清道光年間(1821年-1850年)の抄本蒙古訳語に至り h-の完全な脱落が認められるという。これは漢字で記されたモンゴル語によって導き出された一つの考えである。韃靼館雑字(15世紀後半か)でも漢字モンゴル語によるかぎり一部の語を除きおおむね h-は保たれていたと結論する以外にない(表2参照)。

しかしながら、先に述べたように、ウイグル文字 X-で語頭の h-にあたる漢字音(軟口蓋の摩擦音)を表記した事実から推し量ると、通常この文字 X-で記される q-はすでに摩擦音となっていたということになる。q-が摩擦音となっていたからには、この言語では、語頭の h-は、少なくとも男性母音に前接するものに就いて、すでにゼロとなっていたに違いない。なぜならば、音変化の筋道として、まず語頭の摩擦音 h-がゼロとなる変化が終息し、それではじめて破裂音 q-は摩擦音になることができる。そうでなければ q-から変化した摩擦音も、語頭の h-と同様にゼロとなってしまう。

韃靼館雑字(15世紀後半か)が上のような状況であるならば、登壇必究や盧龍塞略を含め華夷訳語に類する後代の漢字モンゴル語も前代の表記を受け継いだ擬古的なものであるかもしれず、注意が必要となる<sup>8)</sup>。

注

- 1) 元代のウイグル字モンゴル語は中村淳/松川節(1993)「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』VIII. pp.1-92,+8pls.によった。
- 2) 本稿は対音対訳資料研究会(1999.3.21-22。於富山大学)で配布した資料に基づく。
- 3) Mostaert, A. (1977) *LE MATÉRIEL MONGOL DU HOUA I I IU 華夷譯語 DE HOUNG-OU (1389), I*. Bruxelles. の Rachewiltz による序文によると、韃靼館雑字は 15 世紀後半に編纂されたもので実質的には華夷訳語甲種本(1389年)と同一のものであるという。また、ウイグル文字への復元は機械的なもので無検討になされているというペリオの指摘を紹介し、明らかにモンゴル語の基本的な規則を知らない者の手によるものだと断じている。上記は研究会で配布された中村雅之氏の訳文を参照した。
- 4) 注 1) 参照。翻字は以下のとおり。aleph (ʿ) beth (β) waw (W) zain (Z) heth (X) heth+: (X) yod (Y) kaph (K) daleth (D) mem (M) nun (N) pe (P) sadhe (C) resh (R) sin (S) taw (T) hooked resh (L)。
- 5) 涵芬樓秘笈本による。最近、栗林均氏編『『華夷訳語』(甲種本)モンゴル語全単語・語尾索引』(東北大学東北アジア研究センター、2003年)が発刊された。この方面の研究にとって朗報である。
- 6) 東洋文庫所蔵の舊鈔本韃靼館雑字による。
- 7) 黄宗鑑(1993)「《華夷譯語》的蒙古語詞首 h」『民族語文』1993-4, pp.19-22.
- 8) この点につき、中村雅之氏は「服部四郎氏の元朝秘史パスパ字本原典説について」

(『KOTONOHA』第5号、2003年)において登壇必究の語頭の h-の消滅に言及しており興味深い。